

台湾における日本語文藝活動の過去・現在・未来

——俳句を中心にその教育文化史的意義を点描する——

磯田 一雄

一、はじめに

——台湾人が日本語で詠む「重い意味」

『朝日新聞』に連載中の大岡信「折々のうた」で『台湾萬葉集』が紹介され、戦後半世紀を経た今なお日本の傳統的短詩文藝が一般の台湾人によって詠まれているというところが、日本の読者に新鮮な驚きをもって迎えられているからほぼ十年になる。日本の歌人より率直に「生活を活写」し、「諧謔性」に富み、「どの作者も短歌形式を楽しんでいる」ことが高く評価されていた。これに対して台湾俳句の紹介はずっと遅れ、紹介例もはるかに少なかった（大岡信、一

九九四・二〇〇一）。その後『台湾俳句歳時記』（黄靈芝、二〇〇三）が刊行されたが、これも『台湾萬葉集』に比べると知名度は高くない。

日本語で和歌や俳句を創作する人が台湾にいるという事実をどう受け止めたらいいいのか、驚き戸惑う日本人も少なくない。短歌や俳句のような個人の感性や心情の表現を、母語ではなくあえて日本語で表現するということには、とても重い意味が含まれていると思われるからである。それはいうまでもなく、かつての日本統治期の政策が絡んでいるためである。日本は戦前台湾で日本語の使用を強制した。日本語（國語）は「大和民族の精神的血液」であるとされ、

日本語教育は日本に「同化」させるための最も重要な手段だとされた。言語ナシヨナリズムが大手をふって歩きまわっていたのである。その日本語でなぜ今一般市民による文藝的創作が行われるのか。

植民地朝鮮においても、日本統治末期には「皇民文學」が唱えられ、詩人の中には、日本の和歌や俳句までたしなむ人々がいるほどであったとされているが、戦後は全くその跡を留めていない。それに對して戦後台湾では國民黨の支配の下で、「日本化」はすなわち「奴隸化」であり、「中國語」「中華文化」によって「浄化」される必要があるとして、日本語による創作だけではなく、日本語の使用そのものが禁止された。しかし日本語教育を受けた世代が日本語を話すことを止めなかっただけでなく、文學でも日本語が生き残った。数々の短歌會・俳句會・川柳會などが生まれ、現に活動を續けている。これは奇跡のように思われるのではなからうか。

筆者が始めてこの主題に接したのは、二〇〇二年六月にシカゴ大學で行われた、北美州台灣研究學會第八回大會におけるクリーマン（コロラド大學）の報告であった（Keenan, 2002. ペーパーは公表されていない）。彼女は『台灣

萬葉集』から一四首の短歌を例に挙げて、日本統治期へのノスタルジアが短歌を詠むという活動の基調にあると捉えていた。その内容は、(a)すでに日本語の「滅びた」國で自分があえて日本語の短歌を詠む意義を問うた歌、(b)戦争體驗を詠んだ歌、(c)日本統治期の思い出を詠んだ歌、(d)複雑な言語事情にさいなまれた悲哀を詠んだ歌など、「ノスタルジア」と總稱されるようなものであった。

- (a)の例 指を折り短歌詠み居れば忘れ居し大和言葉
が次々と湧く 高 秀
- (b)の例 翌朝は巨鯨を葬る愛機撫で夕焼空に心を燃
やす 蕭 翔文
- (c)の例 お手玉に陣取りごっこ縄跳びと平和なる時
代に幼時過ぎき 江 苑蓮
- (d)の例 日本語と台灣語混じる北京語の御伽噺に孫
ふくれ面 蔡 西川

最後の(d)はこの歌一首だけであり、しかも他の歌とはやや異質のように思われる。これは「ノスタルジア」と

いうよりは現實の自己のおかれた状況をみつめている歌ではなからうか。

これに対して、むしろこの（d）の面を、短歌だけでなく川柳をも視野に入れて集中的に追及したのが黄智慧の研究だと思われる。黄智慧（中央研究院民族學研究所）は、まず解放後の台灣で、日本語文藝が蘇った事情を次のように解明している。（黄智慧、一〇〇三）

（1）（戒嚴令下で）公式の場において、表現の自由が奪われたため、最後の手段として日本語で、しかも目立たない、暗喩や隱喩が多く用いられる日本語の詩文に「植民される者」としての心情を寄せていた（先の植民地化で得たものを「武器」にして、後の植民地化に對して抵抗することを、黄智慧は「二重植民化後の抵抗の形態」と呼んでいる）。

（2）台灣のこれらの日本語詩のサークルの作者達は、すべて戦前の學校教育の中で、また彼等人生の青年期において、これらの文學形式に接触したが故に、これらの詩を作る能力が備わつ（てい）た。

（3）しかしそれは多くの犠牲を伴うものであり、それは諷刺やユーモアの影につきそつ「悲哀」として表現され

る。この「悲哀」は次の四つに分類される。（一）國籍を翻弄される悲哀、（二）誤解される悲しみ、（三）世代間でコミュニケーションできない悲しみ、（四）世代間で傳承できない悲しみ。

これは Keeman のいう「ノスタルジア」に相當することを、「抵抗」と「悲哀」というアンビバレントな複合的感情として分析したものと言えよう。単に懐かしんでいるのではなく、第二の植民地化への抵抗としての意義を擔っているのである。

これらは主として短歌（黄の場合には、更に川柳）に基づいた議論であつて、俳句はほとんど例に取り上げられていない。短歌には叙情性とともに叙事性があり、生活體驗や歴史的事件などを生々しく映し出すことができるし、また川柳は社會風刺に富んでいるためである。台北俳句會代表・黄靈芝が「短歌は感情で詠むものだが、俳句は感覺で詠むもの」と言っているように、俳句は短歌のような叙事性に乏しいと言える。Keeman や黄智慧の論議に俳句がほとんど例に出てこないのはそのためではなからうか。（九・一）同時多發テロの時、日本の新聞の短歌欄には何週間にもわたつて多くの作品が寄せられたが、俳句欄には

これを詠んだ作品が非常に少なかった。これは短歌と俳句の性格の違いを端的に示しているように思われる。

これに對して今井祥子（日本立教大學大學院。当時中央研究院民族學研究所留學中）は、台灣人が日本統治期に日本語文藝を始めた経緯や光復後の展開を省みながら、特にその最初の動機について、「台灣人が短歌や俳句を始めた動機には、（文化的に上流の）日本人としてのたしなみとして詠む、ということがあるのでないか。短歌や俳句が詠めるような教養を身につけるといことが、品格ある日本人としての一つの資格のよううけとめられていたのではないか」という趣旨の發言をしている（二〇〇四年四月八日、東アジア文化史研究會）。

つまり、単に日本語ができると言うだけでは、被植民者のエリートとして十分ではない。短歌や俳句のような傳統的日本文化を身につけることによって、（エリートの）日本人（＝内地人）と實質的に対等になれると思われたのではなからうか。これは日本人と台灣人との融和に役立つと言う意味が大きいから、政治的に利用される可能性があったかもしれない。いずれにせよ、現在の台灣日本語文藝が日本統治期に蒔かれた種子の戦後の蘇りであるのなら、最

初に台灣人がこれを受けとめたときの動機を明らかにすることが重要な意味を持つであろう。

二、皇民化運動による日本語文藝の利用

筆者はこれまで主として教育史の領域で、台灣と朝鮮（時には更に滿州）を對比しながら研究してきた。日本の植民地化に對する反応は朝鮮と台灣とは共通性とともに對照的なことが多いのだが、短歌や俳句のような日本語文藝の受容と發展は、近代東アジア教育文化史におけるその對照性の典型的な例と思われる。

Peter Duus は最近のシンポジウムで、植民地近代化論と平行して、植民地經驗の個別性（階層・世代・職業・地位・性別などによる經驗の差異）、植民地權力に對する「協働」（親日）と「抵抗」（抗日）の相對性、光復以前と以後の連續性に着目した時期区分の見直し（例えば一九三〇～一九六〇年を《trans-war period》と設定する）を提案している（Peter Duus, 2004）。これは台灣における一般市民の日本語文藝活動を捉える上で、きわめて適切な枠組みだと思われる。例えば「植民地經驗の個別性」は、日本語

文藝活動には特に當てはまるであろう。また光復以前に時かれた種子が、光復後どのように展開したかを捉える上で『transwar period』の設定は特に有効であろう。

日本語教育研究者の蔡茂豊は、日本統治期に「中學（中等教育）以上の『國語教育』は成功したろうが人口のパーセンテージからいって餘りにも低かったし、公學校の『國語教育』は成功したといえるかどうか疑問であると言いたい」と述べている（蔡茂豊、一九八九）。つまり日本語使用の二極分解が台灣社會に起こったということであるが、短歌や俳句を詠むことはこの階層や世代による差異を更に徹底させる方向にあったのではなからうか。

台灣における「國語」（日本語）教育史において、短歌・俳句などの日本語短詩の教育が研究対象とされたことは、管見の限りではこれまででなかったように思われる。それはきわめて微細な問題と思われたからであろう。確かに俳句や短歌は、日本語教育全體から見れば、きわめてマイナーな周邊の問題であろうが、逆にそこからこれまで見えなかったものが見えてくるのではないかとも思われる。さらにこれは日本統治期とそれ以後とを繋ぐ問題でもある。ポストコロニアル研究においては文學が重要な研究の対象

の一つになるが、短詩であっても文學の制作は高度に洗練された言語的能力を必要とし、一般に植民地政策の下で宗主國側が一般の被植民者に要求するレベルを超えるものである。また文學的営爲は個人の主體性の確立を必要とする。このような問題は日本語・日本文學を受容した台灣人の視角からでなければ、その意義を捉えられない。台灣における國語教育の光復後への「影響」、あるいは日本語の「残存使用」の研究はこれまでもなされてきたが、これはその域を超えた問題であると言えよう。

短歌や俳句などの短詩は本來専門家でない一般の人々によって詠まれるものであるが、台灣においても同じだという點が重要である。というのはこの點が同じく日本の植民地支配を受けた朝鮮の場合と對照的だからである。池明観はこう言っている。

こうして、朝鮮文學は、文學者組織の面からも作品活動の面からも日本の植民地文學に轉落してしまいうであった。詩人の中には、日本の和歌や俳句までたしなむ人がいるほどであった。

（池明観、一九七九・四一七）

これは皇民化運動期には、朝鮮においても日本語の短歌・俳句が詠まれるようになったという記述であるが、日本語による制作そのものが忌まわしいものとみなされているのみならず、「和歌や俳句」をたしなんだのは「詩人」であつて、一般民衆とは述べていない點が注目される。そもそも、朝鮮人が日本語文藝を行うようなことはあつてはならないこと、と受けとめられている。台湾の場合にも戦後日本語文芸に対する白眼視はあつたし、ある意味で現在でもないとは言えないが、ともかく現にその活動が活発に行われている点は大きな違いであろう。専門の作家や詩人でない、一般民衆が短歌や俳句をたしなむ域に達していたという事實が重要なのである。

それではそのような活動は何時から始まったのか。

二〇〇四年度天理台灣學會のシンポジウムで、台湾人の俳句や短歌は「一九四〇年代の皇民化運動期に急速に浸透し發展したのではないか」という、下村作次郎による問題提起があつた。これは例えば「一九四三年一月一三日に開催された台灣決戦文學者會議で、短歌や俳句の重要性を訴える發言が少なからず見られる」ことなどを根拠にしている。確かに同時期の台湾では、現地の俳句会や歌会に参

加する台湾人が少数ながら見られるようになり、新聞の俳句欄や短歌欄にも台湾人の投稿が見られる。また皇民奉公會文化部の機關誌『新建設』は、戦意高揚のための「奉公川柳」更に「奉公俳句」「奉公短歌」の欄を設け、これに内地人よりは少ないものの台湾人も作品を寄せていた。しかしこういう体制利用のための策動が、現在の台湾短歌・俳句の状況にそのままつながるかどうかは問題のあるところだろう。

皇民化期に短歌や俳句を教化に利用するという風潮は當時の日本内地でも顯著だった。「御民われ生けるしるしありあめつちの榮ゆるときにあへらく思へば」とか、「今日よりはかへりみなくて大君の醜の御盾と出で立つ我は」というような短歌が實によく使われたし、「愛國百人一首」というものもあつた。また小學校高學年の國語の教科書には既に短歌や俳句が掲載されていたが、一九四三年に新たに發行された内地の文部省發行の國民學校用國語教科書『初等科國語 五』（第五學年前期用）には、古典や近代の短歌俳句に加えて、「戦時短歌・戦時俳句」というべき教材まで載せられている。

動員の第一夜なり明けやすき
敵前に上陸すなり秋の雨
突撃を待つ草むらに蟲すたく

『初等科國語 五』、「十九 動員（全七句）」

これに對して、台灣の初等教育においては短歌や俳句の教育はほとんど行われていなかったと言つていい。公學校用の國語教科書を見ると、短歌教材が現れるのは、台灣總督府編纂第三期國語教科書『公學校用國語讀本 第一種 卷十二』（第六學年後期用。一九二六年より使用）の「第一課 明治天皇御製」からである。「新高の山のふもとの民草も、しげりまさると聞くぞうれしき」など計一〇首が含まれている。俳句が現れるのはずっと遅く、第四期國語教科書『公學校用國語讀本 卷十二』（一九四二年）の「第十 俳句」に「元日や一系の天子富士の山」など八句が載せられている。一般の短歌と俳句両方が載るのは、一九四四年に發行された日本統治期最後の第五期國語教科書『初等科國語 七』（第六學年前期用）の「六 ばらの芽」と、同『初等科國語 八』（第六學年後期用）の「十一 元日や」においてである。また内地の國民學校國語教科書

と違つて、台灣の國語教科書には、先の「戰時短歌・戰時俳句」のような課も載つていない。その上一九四四年ともなれば國民學校（戰時下の公學校）でも勤勞奉仕・空襲・疎開などでまともに授業ができなくなつていた。したがつて天皇御製を除き、日本統治期の台灣人は初等教育で短歌や俳句にほとんど接していなかったと言えよう。

もつとも、中等學校を受験するには日本人小學校の使用教科書を取り寄せて學習しておく必要があつたから、そういう子どもたちは日本人と同じ短歌や俳句の教材に接したであろう。ただ、それは読むだけで、作る域まで達することはなかつたと思われる。また日本人小學校の教師の中には、上學年の子どもに短歌や俳句の指導をすることがあり、學校誌に載せられた作品の中に台灣人の子どもの作が混じつている例もあるが、それが一般的であつたとは思われない。

皇民化期の、それも最後の段階になつて短歌や俳句の皇民化に果たす意義が強調されたということは、植民者側の意図を明らかにするものではあつても、被植民者側におけるその効果を直ちに保證するものではない。さらに日本統治期に強調されたから今日まで残つたのだと直ちには考え

にくい。例えば宗教の場合、日本が懸命になって押しつけようとした國家神道は、戦後台灣から跡形もなく消え去ってしまったのである。仏教關係の布教も同様の運命をたどったが、天理教だけは現在までかなりの數の信徒がいるのは注目されていい。天理教受容の内的必然性があつたからであらう。短歌や俳句にしても、受け止めた側がそれだけの内的必然性があつたからこそ、自然消滅せずに生き残り發展したのだと考えられる。短歌や俳句は短いから皇民化の教化に利用しやすいと思われたことと、短歌や俳句が詠めるようになることとの間には距離があるし、ましてやそれが光復後も續く、あるいは蘇るといふことの間にはさらに距離があると言えよう。

三、台灣人に詠まれた短歌・俳句の起原

台灣人による短歌や俳句の創作は、皇民化期よりずっと以前からあつた。しかしそれは俳句が普及する以前、日本統治初期の台灣には、漢詩文による日本人と台灣人の交流があつたことを捉えておく必要がある。日本の植民地支配には、欧米のそれには見られないさまざまな独特の現象が

生じた。被支配者の文化が支配者との交流に重要な役割を果たしたのもその一つであらう。領台初期の台灣の文人紳士は頻繁に日本の官僚と漢詩を吟唱し、宴を張った。兎玉源太郎や後藤新平は、台灣の伝統的な漢詩文の価値を認めなかつたが、自らは漢詩集を刊行するほどの素養があつた。また日台の漢詩文はかなり高度の相互通用性があつた。読みの音声は違つたが、文字面だけでもかなり高度の交流目的を達したという。陳培豊によれば、日本人と台灣人の間に「同文同種の水乳の交わり」があつたのである（陳培豊、二〇〇五）。台灣領有と深いかわりのある乃木希典も漢詩をよくし、張学良は晩年まで乃木の漢詩を愛唱していたという。

領台直前の台灣は「日辨公事、夜接詞人」という状況で、官吏と土地の名士が唱和した詩文がたくさん残されている。漢詩文は漢民族のアイデンティティのよりどころであり、「詩社」は抵抗の據點ともなつたが、一方では懐柔にも利用された。日本統治初期に漢詩が盛んに行われたのは、日本の官僚の策動とされる。漢學の素養があり、漢詩を作ることもできた日本の官僚は台灣の紳商に歓迎され、両者の漢詩の唱和による交流は、台灣統治を潤滑にさせる役割を

擔っていたのである。(楊永彬、二〇〇〇。吳文星、一九九二)。

しかし近代の日本人は漢詩文を本来の日本語の文脈の中に同化して、皇国史観を伝える武器にまでしたのに、台湾総督府は漢詩文が台湾人に対しても同じように「同化・皇民化」に利用しようとは思っていなかった。漢詩文は台湾人に「支那」を想起させる危険な代物であった。戦時下の台湾では漢詩文は「皇民文学」として認められず、「皇民化」の外に切斷された、と陳培豊はいう(陳、二〇〇五)。

しかも脱亜入歐をめざした近代化により、日本人の漢詩文の教養は急速に低下した。台湾人の漢詩文もそれと歩調を合わせるように衰えて行つた(松永正義、一九九三)。一方では「國語」(日本語)教育が進展した。この結果漢詩文による交流が低調になり、いずれは日本語短詩——短歌・俳句——による交流がこれに代わるであろう可能性が豫見できる。ただそれが官側によつて意図的になされたか、それとも自然發生的なものであったかが重要である。

これまでに明らかにされていることは、日本統治期に台湾人が短歌や俳句を始めたのは、日本人の主催していた短歌會や俳句會への参加が契機になつた場合もあるだろうが、

多くの場合中等學校における「國語」の教師の指導によるものだったということである。日本統治期の台湾では、初等學校は日本人用の小學校と台湾人用の公學校に別れていたが、中等學校は制度的に日本内地と同じであり、日本人と同等以上の日本語力がなければ入學できなかつた。また台湾人志願者の競争率は日本人のそれを遥かに上回っていたからよほど優秀でなければ合格できなかったし、台灣語を忘れてしまうほど日本語に浸り込む必要があつた。一方中等教育での「國語」には多くの短歌や俳句が教材に含まれていたから、當然これに惹かれる可能性は大きかつたと思われる。

ある女性台灣歌人はこう詠んでいる。

赴任し來し師は歌の道重んじて乙女われらに短歌競はせぬ

師は常に自責し給ひきわれらより母國語奪ひし罪は深しと

教へ子の真心により罪意識薄ると師の喜び言ひき

(孤蓬萬里、一九九五。これらの歌は最近刊行の個人歌集にも掲載されているが、本人の

同意がないので名を秘す)

これらの作品は、短歌の叙事性、歴史的證言としてのすぐれた點を示すよい例であろう。作者は一九二〇年生れで、日本統治期に高等女學校に學んでゐる。當時の日本の中等學校の「國語」の時間は短歌や俳句のような日本語の短詩が非常に重視されていた。この「師」も生徒に懸命に短歌を教えた。その成果で作者は短歌が詠めるようになり、今に至るまでそれを續け、自分の歌集も出しているのだが、それを指導した「師」は、後に彼女等の同窓会に招かれた時、當時の「國策」に忠實に従つたものとはいへ、生徒から台灣語を奪い日本語を強制してしまつたことを、「自責」せずにはいられなかつた。しかし日本語により自己を表現し解放するメディアを獲得した教え子たちは、それをむしろ逆に積極的な意義あるものとして受けとめてくれていた。その事實によつて「師」は救われたといふのである。

このように、中等學校の國語の先生の手引きで短歌を詠むようになったと言う例は多い。台北俳句會を創始し『台灣俳句歲時記』を編纂した黃靈芝も中學校の國語における短歌や俳句の印象を語っている。また、台灣歌壇を創始し、

『台灣萬葉集』を編纂した吳建堂(筆名孤蓬萬里、一九二六—一九九八)は旧制台北高校時代に犬養孝の講義を通じて「萬葉集」に親しんでいたという。中等學校の國語教育における短歌・俳句教育の効果の大きかつたことを偲はせる。

したがつて學校教育における短歌や俳句の指導は、台灣における中等學校の歴史とともに古いのではないかと思われる。これが公刊された例としては、大正一二年(一九二三年)に發行された台灣師範學校の校友會誌には台灣人生徒の詠んだ俳句がかなりの數載せられている。本科一年生から四年生まで各學年の生徒の作品が載せられているが、本科一年生の作品全一五句のうち、一人一句ずつ紹介する。(台灣師範學校、一九二三)

寒月や静かにかゝるねむの枝	李	文舉
夕立や高砂島は湯氣の中	林	清徳
白露や芋の葉末に二つ三つ	李	春生
暁を覚えぬ春の風うら、	李	深煙
花一輪浮きてとびつく小魚かな	曾	蓮芳
寒月や水の底にも木の葉にも	王	承達

台湾教育會の機關誌『台湾教育』（一九一二年～一九四三年）には、「文苑」（時には「文藝」という短歌・俳句・詩・短文及び漢詩からなる欄があり、第二七〇号（大正十三年十二月）の「文苑」には台北第二中學校（台湾人ための中学校）の三年生の俳句が多数掲載されている。その大部分が台湾人生徒で日本人生徒の作は少ない。こうした事實は、既に大正後期の時點で、中等學校における俳句や短歌などの指導がかなりの成果を擧げていたことを示している。

四、公學校教師と俳句・短歌——『台湾教育』の文苑欄

台湾人がいつごろから俳句や短歌を詠むようになったのか、という問いには簡単には答えられない。しかしここに一つの手がかりがある。台湾教育會の機關誌『台湾教育』の文芸欄「文苑」である。「文苑」は時には「文芸」などと名前の変わったこともあったが、大体この名前で終刊まで続いていた。ここには公募による短歌・俳句・漢詩が載せられていた。投稿者は多く公學校の教師と考えられる。その中にある段階から台湾人の教師の投稿が出てくるので

ある。これは台湾人の間に短歌・俳句・漢詩がどのように行われていたか、その変化を示す一つの指標になる。

『台湾教育』の「文苑」を昭和初期の段階で見ると、漢詩欄はほとんどが台湾人の投稿であり、逆に日本語文藝の欄はほとんどが日本人の作で占められている。たまた台湾人の詩があるが、短歌や俳句まだ見られない。それが昭和五年（一九三〇年）ごろから台湾人の詠んだ短歌や俳句が時々見られるようになり、昭和九年（一九三四年）になると、台湾人による短歌や俳句の投稿が定着した感じになる。公學校の台湾人教師は當時の「日本語人」の代表であり、日本語短詩を最初に率先して詠み始めた台湾人の多くは教師だったと言えよう（実は同様の現象が、同じ時期の朝鮮教育會発行の『文教の朝鮮』にも見られるが、ここでは指摘のみに留める）。

公學校教師の投稿句の比較的初期の例を『台湾教育』第三四二号（一九三一年一月）の「文苑」から挙げてみよう。

〔和歌〕 雜詠 新竹 鄭嶺秋（全五首より）

こもごもに熟れしと子等の告げて來し畑の蕃茄を見た
くなりたり

窓外に何やらあらむ我が言に耳かさずして見とれるあの子

隣なる一年生の稽古聲國語たくみになりけるかな
教子を叱る事もなく此頃の心ほがらにあるが嬉しき

〔俳句〕 雑詠 馬公 顔精義（全三〇句より）

暮易き秋の野道やバツタ飛ぶ

一坪の小庭にも菊香ふかな

猫眠る小春日和や菊薫る

霧社事件ラヂオ圍みて噂かな

木枯にガジマルの葉の埃かな

「文苑」欄を見ていくと、やがて和歌（短歌）と俳句の両方に投稿するものも出てくる。こうした状況からして、皇民化期ともなれば、台湾人による短歌や俳句が珍しい現象ではなくなったことが豫測できよう。

このように『台湾教育』は、台湾人の間に日本語文芸がどのように普及して言ったかを見る一つの指標になる。資料的にも日本統治末期までほぼ一貫して存在するので、確認がしやすい。という、公学校教師という特殊な世界を

対照にしているように見えるが、もともと戦前の日本統治期に日本語文芸に接し、自らも行おうとした台湾人自体が階層的に限られていた。『台湾万葉集』などを見ても、台湾歌人・俳人は圧倒的に医師と教師が多い。医師は専門学校以上の高等教育を受けており、公学校教師は師範学校など中等教育を受けている。これら教養のある階層を中心に日本語文芸活動が普及したとすれば、公学校教師の世界での日本語文芸の普及を一つの代表例と見るのは十分根拠があると考えられる。

彼ら公学校の教師たちはどのようにして短歌や俳句などに接したのか。先に見たように、師範学校の生徒が俳句や短歌を詠むならば、その生徒が赴任する公学校の教師が俳句や短歌を詠んで当然であるとも考えられる。しかし台湾人の公学校教師には、内地の場合と同じように「傍系」が少なくなかった。特に女子の場合には高等女学校の補習科を出て公学校教師になる例が多かった。したがってこれは「中等学校」における俳句・短歌教育によるものと一般化したほうがいいだろう。

いっぽう、日本語短詩に接触した契機（あるいは発展させたメディア）としては、中等学校での國語指導のほかに、

新聞や雑誌の投稿欄などマスコミの影響を考えなくてはならない。現在も俳句を読み続けている Y・K 氏は日本の敗戦間近、米機が台湾を爆撃・機銃掃射をしながら投下した宣傳ビラに「桐一葉落ちて悲しき浪花節」という俳句を発見して感心しているが、彼は中學時代（一九四一年進學）から日本語短詩が好きで書物や雑誌・新聞の短歌や俳句を読み漁って楽しんでいたと言う（孤蓬萬里、一九九四）。

また現在も日本の俳誌・歌誌にも投稿している R・K 氏は、公學校時代に小學館の懸賞作文に入選したり、東台湾新報の文藝歌壇に短歌が入選したのを契機に短歌の手ほどきを受けたりしている。このように新聞・雑誌の短歌・俳句欄なども俳句や短歌に接する重要なメディアであり、日本の同世代の體驗とも通ずるものである。どのような新聞や雑誌が彼らに親しまれたかの研究が重要になる（孤蓬萬里、一九九七）。

ところで中等學校での國語學習を、少なくとも一年以上まともに受けられた世代は、一九四二年までに入學した世代だといつてよい。台湾決戦文學者會議の行われた翌一九四三年（昭和一八年）ともなると、中等學校の生徒は勤勞奉仕や學徒兵に動員されたためにろくに授業を受けられなく

なり、在學中にまともな學習をしていないのである。言い換えれば短歌や俳句の教養を中等學校で授けられたのは一九三〇年ごろまでに生まれた世代ということになる。事實現在の台湾の日本語文藝の會の會員はほとんどが一九二〇年代生まれである。それにしても短歌や俳句の皇民化における意義の強調された時期に、初等教育でも中等教育でもまともな授業をする條件がなくなっていたのは、何とも皮肉である。

五、戦後の日本語短詩文藝と台湾ナシヨナリズム

黄智慧は台湾人による戦後の日本語使用——したがって日本語文芸も——は、「抵抗の武器」だったのだという見解を提示している。日本の敗戦によって「我々の時代がやってきた」という台湾人の期待はまもなく裏切られ、台湾人は国民党政權による「第二の植民地化」を経験させられることになった。これに對する一つの抵抗として意図的に日本語を話し、日本語で表現することが始まったのだというのである（黄智慧、二〇〇三）。この事情を反映している作品を川柳や短歌に求めるならば、

日本語を本気でしゃべる終戦後

高瘦叟

兵の日は反日なれど短歌を詠む今は親日の我の不思議
さ 黄得龍

などがその好例である。日本統治下の日本語学習は「やむを得ず」行ったものであるのに對し、戦後の台湾社會では、日本語で、しかも短歌や俳句で表現すれば、日本語を解しない国民党の権力者には容易にわからないので、こういう表現活動が全く自主的に起こったという（黄智慧、二〇〇三）。戦後台湾においてこれまでほとんど日本語だけで創作活動を行ってきた台北俳句会会長の黄靈芝について、岡崎郁子は「台湾人をないがしろにした政府の圧政がなければ、また日本語が禁止されることがなければ、黄靈芝は日文での創作ははじめなかったのではないかとさえ思う」と指摘している（岡崎郁子、二〇〇四・一四四）。

フランツ・ファノンがアルジェリアの解放運動において、新しい人間は、「それまで一方的な支配に服していた民衆が、抵抗のためのメディアを獲得していくことによって生まれる」と言っている。既に日本統治期に、日本語は「新世代台湾知識人」の支配者に對する「抵抗の武器」になっ

ていたとされるが（陳培豐、二〇〇一 a）、戦後の短歌や俳句も台湾人にとって「抵抗のメディア」になり、彼らはそれによって「新しい人間」になりえたということになる。アルジェリアにおいて民族解放戦線のラジオ放送を通じて、アラビア語ではなくフランス語がアルジェリア人の解放のために「民族的資産」として「再獲得」されたのになぜかえるならば、かつて強制された日本語がいわば「民族的資産」として再獲得されたのだともいえよう。もともと、アルジェリアは台湾のような「二重植民化」ではないし、メディアはラジオであり、そのフランス語は書き言葉ではなく話し言葉としてのそれであったから、単純には比較できない。フランス統治期のアルジェリアの就學率は、台湾の公學校とは比べ物にならないほど低かったから、書き言葉としてのフランス語の普及も非常に低かったであろう。またすべての人に開かれたラジオの持つ大衆性に對して、日本語短詩は全體としてみればごく一部の階層のものだが、それでも「抵抗のメディア」としての意義は失われないうであろう。

こういう状況を見れば、台湾で書き言葉の日本語短詩が抵抗のメディアにならざるを得なかった事情も、よりよく

納得されるように思われる。藤井省三はベネディクト・ア
ンダーソンの「想像の共同体」理論に基づいて、皇民文學
を核として台湾ナショナリズムが形成されたと主張してい
る（藤井省三、一九九八・六四頁）。短歌俳句のような日
本語短詩についても、このことは光復後を含めていえるよ
うに思われる。假にその擔い手に階層的な偏りがあったに
しても、台湾の日本語短詩が台湾のネオナショナリズムの
形成に寄与していることは否定できないであろう。

台北俳句會の主宰・黄靈芝は、「日本は敗戦によりゼロ
から再出發したが、韓國は一旦小數點下まで落ちてから這
い上がった」という小田實の警句をひいて、「この點、台
灣人はもつと惨めである。昭和二十年なる年号が民國三十
四年だと呼びかえられた日から、人々は忽ち啞となり聾と
なり盲となった」といつている（黄靈芝、二〇〇三・あと
がき）。日本統治期には日本語が「國語」とされ、母語で
ある台湾語は抑圧された。日本から「解放」されたと思っ
たら、今度は北京語が「國語」となり、台湾語は依然とし
て日本語同様に抑圧されたのである。

俳句や短歌をたしなむこと自體は戦後台湾に歌壇や俳句
會ができる前からあったにしても、それが實際にいづろろ

から始まったかを確かめるのは容易でない。それは戦後台
灣短歌・俳句の起源について語りうる人たちの多くが既に
鬼籍に入っているからでもあるが、當時の政治情勢のもと
では日本語で表現活動を行うことは「犯罪」になったとい
う事情もある。

そもそも台湾の日本語文藝團體は、發足當初「台北歌
壇」「台北俳句會」などと名乗って、「台湾」を名乗ること
を避けることを餘儀なくされた。發足當時の社會状況では
「台湾」を名乗ることはタブーであった。「中華民國」に對
する反逆を企図していると疑われるおそれがあったのであ
る。

黄靈芝によれば「當時の法令として凡ゆる會合はそれが
十人を超す場合、事前に警察に届けることを要した。また
凡ゆる組織は登記を經てはじめて活動ができた。日本語に
よる文藝の會が登記できるはずは必ずやなく、むしろ危険
人物が自首してきたことになり兼ねないので、私達は常に
島原のキリシタン衆のように蠢いた」。初期の「台北歌壇」
と「台北俳句會」は常々諜報人員に目をつけられる危険に
さらされていたのである。黄靈芝は「その筋に身を置く友
人」から「君は今に掴まる」と何度となく警告されたとい

う（黄靈芝、二〇〇三・二七九以下）。

こういう経験を長年積み重ねれば、勢い諷刺やユーモアに富んだ表現が強くなることは容易に想像できる。台湾の日本語文藝に見られる独特の味わいは、これが源泉になっているのではないかと思われる。日本語で詠むことに「重い意味」があるというのは、こういう現実をめぐってであり、これに對して「どの言語で表現するかはその人の自由であり、権利であって、そのことをめぐってことさら騒ぎ立てる必要はない」という意見をいただいたことがある。筆者もその通りだと思うが、何かそう言っただけでは済まされないものを感じるのである。

六、日本語による「台湾的なもの」の創出

——ノスタルジアを超えて

今日の台湾に日本語で短歌・俳句・川柳を詠むことを愛好する人々が多くいるといっても、人数や結社の数は、もちろん日本とは比べものにならないが、日本語文藝のための結社があるという基本的な形態は變らない。これらの専門の作家でない人々による日本語の短詩は、台湾では今もって正統な國民文學の地位を認められていないとされてい

るが、さまざまな點で文化史的に無視し得ない現象であると思われる。最近では「台湾文學」の系列で、俳句や短歌を研究テーマに選ぶ若い研究者が出てきつつあるともいう。日本の統治からの解放後なぜ短歌や俳句を詠み始めたかについて、黄智慧は先に（１）戦後の国民党政府による「二重植民化後の抵抗の形態」として、（２）戦前の学校教育の中で俳句や短歌に接していた、の二点を指摘した。後者については、戦後日本に留学した人や日本人妻などの場合を除いて、台湾で現在日本語文藝に参加しているほとんどの人があてはまるだろう。それに對して前者の動機はどうだろうか。現在台湾短歌や俳句を詠んでいるすべての人がこの條件にあてはまるわけではないように思われる。台湾俳句界を代表する黄靈芝の場合にしても、「第二の植民地化」に対する抵抗の意識がそれほど強かったようには思われない。要するに日本語で詠まざるをえないような宿命のもとにおかれていたのである。世代や個人による差により一概には言えないにしても、これは台湾の多くの歌人・俳人たちに言えることのように思われる。

先のクリーマンの指摘のように「青春時代Ⅱ日本時代への郷愁」が動機になった人もいるだろう。本格的に短歌を

始めたのは、亡夫の供養のためであったという女性もいる。また光復後は「良家の日本人」にあやかる必要はなくなつたにしても、「たしなみ」としてという動機まで失われてしまったわけではなからう。日本に留學して詠み始めた若い世代もある。日本語文藝活動への参加にはさまざまな動機がありうると思われる。

長年詠み續けている古参歌人・俳人の多い中で、戦後半世紀を経、古稀を迎えてごく最近、初めて短歌の世界に入ることを決意したという人もいる。この人は日本統治期の中學校時代學徒兵に動員され、特攻隊員になつて戦死した同僚の思い出などを次のような歌に詠んでいる。もつと早い時期に詠まれていれば、『台灣萬葉集』に採録されていたかもしれない。

いくさの庭——學徒兵のつぶやき(抄) R・E

翼折れ護國の華と散りし君南海の雲赤く染まりて

學徒兵假兵舎に月白き夜はあはれ呼びしか父母の名を

先生の擧手の礼受け動轉す残酷ならずや恩師は新兵

亡き友は死して昇級その靈へ直立不動擧手一札す

終戦の勅語をつひに聞きもせでわらぶき兵舎の朝ぞわ

びしき

國破れ山河あれども悲しきは東の海へ去りゆく友よ

こうしてみると特に短歌は歴史的な證言としての大きな意義を擔つていことがわかる。聞き取りなどによる證言と違つて、それは具體的な状況における最も本質的なものを凝縮して文字に蓄積するのである。さらにこの例のような連作の形を取れば、相当の情報を傳達しうるだろう。

次に重要なことは、日本語文藝を媒體にして「台灣的」なものを表現しようとしていることである。『台灣萬葉集』にしても『台灣俳句歳時記』にしてもその意図においては共通しているように思われる。黄靈芝は次のように語っている。

日本語は日本人が台灣人に押し付けた言語、いわば屈辱の言語なのに、なぜそれを戦後も使うのか、と日本人の方に非常によく尋ねられます。日本語に對する感じ方は世代によつて違ふ。屈辱と感じた世代もあつたでしょう。だけど日本語(國語)は東京語が主となつていますね。それじゃ關西辨の人は屈辱の言語とし

て東京語を習ったんですか、と私は反問するんですよ（笑）。明治の頃はあったかもしれないが、そんな感じはなくなっただけじゃなく、と。

最初は便利だと思っただけです、日本語は。言いたいことが言える。日本語は非常に「ずるい」言語ですね。例えば漢字と假名の組み合わせがあるし、この組み合わせにもいろいろあるし、送り假名もあるし、同じひと言がそれによって味わいが違ってくる。カタカナとひらがな、全部假名で書いたときとか。まるで大工さんがいっぱい道具を持って仕事をしようという都合のよさですね。これを利用すればより完璧なものができる。日本語はそういう非常に都合のよい言語だと思っただけです。私はおそらく日本人よりも日本語のことを考えているでしょう。

ひとつにはね、中國の漢詩は非常に素晴らしいものだという觀念があるんですよ、やっぱり。それなのに何を好んで俳句なんか作るのかと。もつとも中國にも漢俳というのはありますけどね。漢字を五・七・五にあてはめて。私たちも中國語の俳句（漢俳）も作るんですが、これは漢字を十七字も使わないんです。大體

七字から十二字の間で。日本語の俳句を中國語に翻訳すると必ず十二字になるんです。十七字も使ったらおかしくなる。

まあいろいろあることだとは思いますが。賑やかだしね。英文の國際俳句なんか、いつも頂いてますけど、あれ俳句とっていいのかなあと思うんです。意味は通じてても良さがわからない。アメリカから来た會員に「良さが分かるのか」と聞くと「わからん」と（笑）。意味は分かるけど味わいがね。

（二〇〇三年一〇月二三日。筆者の聞き取りによる）

黄靈芝によれば、要するに「日本語はいいことが言えて便利」だから使うまでである。言語はメディアであり、人間まで改變する力はないのだ、ということになる。北京語を公用語とする國民黨の政策に對して日本語でもって抵抗するということは、決して日本人のアイデンティティを持つということではないし、また日本語を學べば必然的に日本化されてしまうというのでもない。かつての日本の植民者のもくろみとは異なり、言語を學んだからといってその言語が擔う文化のミイラになりはしないという確信が

あるのであろう。日本の統治政策に對して、言語における日本化は受け入れても、宗教や風俗・習慣を日本化させる試みは結局失敗した。同じように、日本語をいかに徹底して學ぼうと、台湾人のアイデンティティを失ってしまうなどということはありえない。そこまで割り切ったところに台湾「日本語人」の本領があるのではないだろうか（もちろんこの点に関する批判はあるが今は触れずにおく）。

これはまた戦後台湾人が、日本の統治によって「日本化」されたと国民党に非難されたときに、「日本化は文明化であつて、奴隸化ではない」と反論したこととも通ずる。彼らのアイデンティティは「日本化」によつて失われることはなかつたと主張したのである。このことは日本の植民地主義における不可欠な要素であつた「言語ナシヨナリズム」の實質的な克服であるとも言える。またこのことは、さらに翻つてみれば、かつて日本人があればどこまで「國語」に固執したのは、いかに自己のアイデンティティに自信が持てなかつたかを明らかにしているとも言えよう。

これに対して、黄靈芝によれば中國画が日本に輸入されて日本画を生んだように、俳句や短歌も台湾に入れば、日本の文藝ではなく台湾文藝として見られるべきものになる

のだという。例えば次のような句などはその典型と言えるかもしれない（すべて台北俳句會二〇〇四年二月例會の出品句）。

下町は春聯の町廟の町

春聯や大戸おろしたる老舗街

春聯や台北の人とし老いて

高僧の賜びし春聯上位貼

「春聯」は日本にはない台湾独自の「季語」である。季節にしても『台湾俳句歳時記』では日本のように春・夏・秋・冬と分かつのではなく、「暖かい頃」「暑い頃」「涼しい頃」「寒い頃」と分けている。読み方にしても台湾語のものが多く採用されている（例は省略）。

これは民俗性が豊かだということである。黄智慧は、台湾に生活していなければとても理解できそうにないと思われるような俳句が多数あることを指摘している。この点は大正～昭和戦前期の台湾在住の日本人俳人の間で興つた「台湾俳句」論との大きな相違だが（今井祥子、二〇〇三年）、『台湾歳時記』の刊行は「台湾季語」の解説と例句に

よって、「台湾的な表現」を日本人にもぐっと近いものにしてくれたといえよう。「台湾人なればこそ」「台湾に生活していればこそ」の表現を、外部世界の人間にも理解可能なものにしていく努力は、台湾俳句の可能性を高め深めるためにも欠かせない作業であろう。

七、台湾俳句の今後——トランスナショナルな文化現象

以上客観的には「植民地教育史」（自称、教育文化史）という筆者の専攻から言えば越境もいいところで、おこがましいかぎりのことを述べてきたが、越境ついでに台湾の日本語文芸の意義と今後の見通しについて、あえて「学際的」な考察を試みたい。

現在台湾における代表的な日本語短詩結社としては「台湾歌壇」（一九六八年結成、二〇〇三年末「台北歌壇」より名稱変更）、「台北俳句會」（一九七〇年結成）、「台湾川柳會」（一九九四年結成、二〇〇二年「台北川柳會」より名稱変更）などがある。短歌會や俳句會は無論日本統治期にもあったが、それらは日本人（當時の「内地人」）による結社であり、そこにたまたま台湾人（當時の「本島

人」）が参加していることがあったのに對し、現在の台湾の會は日本人妻のような人を含めてすべて台湾人の主催する結社であり、台湾にゆかりのある日本人もかなり多くこれらの會に参加している。

これらの結社は日本の俳句や短歌の結社と連携している。例えば台北俳句會は『燕巢』（豐中市・主宰・羽田岳水）や『なると』（徳島市・主宰・福島せいぎ）と密接な關係があり、黄靈芝の『台湾俳句歳時記』は『燕巢』に九年間にわたって連載されたものをまとめたものである。黄靈芝は二〇〇四年一月の正岡子規國際俳句賞受賞のため始めて來日したが、日本の俳句結社の主宰や會員が時々訪台して多くの合同句會をもっている。短歌の場合もコスモスなど日本の短歌結社とのつながりを持っている。川柳の場合も同様である。さらに會員に日本人や日系人がかなり含まれていることもあって、これら日本語文藝の會は地味だが幅広い日台文藝交流の場になっている。

しかしこの活動を受け継ぐ若い層が台湾の内部にはほとんどなく、遠からず消え失せてしまうのではないかと危惧されているのも事實である。一部の大學の日本文學科などで短歌や俳句をとりあげるような動きもないではないが、

若い人たちに短歌や俳句をやらうという人が少なく、句會や歌會に入ってきたても長続きしないのだという。

その原因は単に日本統治期のような徹底した日本語學習を今の若い世代に期待することは困難だという客観的な状況だけではなく、古参の歌人・俳人の側の心情や態度にも後継者を育てることを諦めているのではないかと思えるような面もなくはないようである。確かに、「皇民化教育」を受けざるを得なかった層は日本語という資本に自己の表現を賭けざるをえないにしても、北京語や台湾語で自由に表現できる今の若い人たちに、そんな必要があるだろうかという疑問はあつて當然だろう。

しかし、そういう消極的な面からだけではなく、もっと積極的な意味のある面からこの問題を考えてみることも必要ではなからうか。台湾の短歌や俳句・川柳は、いわばトランスナショナルな意義を持つ文化現象だからである。これについては、『台湾萬葉集』の編著者・孤蓬萬里（本名 吳建堂）が、台湾の若い人たちは一般に「唐詩選」に惹かれるのが常であるが、現代人は平仄や押韻についてゆけず、むしろ短歌や俳句のほうがこなしやすい、と言っていることは参考になるであろう。

今の台湾には、(1) 短歌・俳句（さらに川柳）を平行して詠んでいる人が多い、(2) 台湾的な表現は自ずから漢籍に通じる、(3) 人事詠が多い（人間中心主義）、と言う三つの特徴があるように思われる。

(1) 台湾の日本語文藝活動で目につく現象のひとつは、短歌なら短歌、俳句なら俳句と固定して閉じこもってしまわないことであろう。また短歌にも俳句にもそれぞれいくつかの會があるが、一つの領域・一つの流派に閉じこもらず、いくつかの會にまたがって参加している人、短歌・俳句・川柳のすべてを詠んでいる人、現在は何れか一つが中心になつていてもかつては二つ以両方参加していたという人が多い。筆者がはじめて台北俳句會に参加したとき、席につくや否やにこにしながら、「台湾が欲しいとトイレ普及せぬ國が一國二制を叫ぶ」という短歌を紙に書いて渡してくれた人がいた。俳句會なのにとちょっと驚いたが、この人は俳句會のほか歌壇にも川柳會にも参加している人だった。日本の結社に参加している人も多く、中には短歌は台湾歌壇と「たんがら」、俳句は台北俳句會・日本の馬酔木燕巢會と台湾燕巢會、川柳は台湾川柳會と日本の番傘川柳會に出詠しているという活躍ぶりの人もある。この人

は「日本語族」は日本が台湾に残した「重要遺産」だから大事にして、日本留学生を増やし、「日本語族」の増加に勤めていると述べている。

なお台湾では今のところ連句は行われていないようである。

(2) 俳句は漢語が多く、漢詩文の世界を背景に持っている。この点で台湾人は近代化によって日本人が失ってしまった漢詩文の教養を(相対的ながら)持っていることが大きな強みになるかもしれない。また台湾季語は多くの漢語を含んでいる。これは台湾俳句独自の表現やリズム形成に役立つのではないか。

龍蝦のもととは張飛や煮て關羽 范姜栢

(黄靈芝、二〇〇三)

この句は蕪村の「易水に葱流るる寒さかな」を思わせるものがある。どちらの句も中國古典の世界を背景にしている。もともと俳諧とは、共通に理解されている教養の世界を背景にして成り立つ言葉の遊びだったという。その点で台湾俳句は、蕪村俳句の精神に近いものがあると言えるか

もしれない。また俳句は短い表現を求めるため漢語が多く使われてきたのだが、例えば台湾俳句で使う「小陽春」は日本でも応用可能ではないか。

小陽春誘ひのあらば行くつもり

徐奇芬(黄靈芝、二〇〇三)

これは「小春(の日)……」と置き換えることも可能であるが、「小陽春」のほうがずっと濃厚なりズムになるだろう。それはカタカナ語の洪水に溺れかけている現代日本人に、新しい表現の可能性をもたらしにくれるかもしれない。

(3) 既に引用した例からも言えるが、台湾俳句は日本の俳句よりずっと人事詠が多いように思われる。また何よりも言葉の遊びや俳諧性が豊かである。

馬酔木野や句帳弓手に行くお俵

文旦を並べ首狩りして遊ぶ

胡蝶蘭褒めてそれから路を訊く

通るたび「本日限り」週年慶

黄靈芝

黄靈芝

葉顯鎧

鄭清治

ユーモアの精神に溢れている句が多い。尾形仿は「實景實感の尊重を絶対視する近代俳句の偏狭な写生中心主義」を批判して、俳諧性への省察を怠ってきたことが現代俳句の不毛を招いたとし（尾形仿、一九七四年・三五〇～三五一）、「作品の中で自己を虚構化し自在な想像力によって俳諧の世界を豊にひろげた蕪村の方法」を取り戻すことを提唱しているが（尾形仿一九九七年・一九二）、台湾俳句は日本の俳句が見失ってきたとされる俳諧性の取戻しにつながるものがあるのかもしれない。

八、「湾俳」と「和俳」による相互交流の可能性

最後に、日本語を離れ、五・七・五の一七字の漢語で詠む「漢俳」に對して、六／＼二字の漢語を用いて詠む「湾俳」の存在にも注目すべきであろう。先にも紹介したように、黄靈芝は「私たちも中國語の俳句（湾俳）も作るんですが、これは漢字を一七字も使わないんです。大體七字から一二字の間で。日本語の俳句を中國語に翻訳すると必ず一二字になるんです。一七字も使ったらおかしくなる」と言っている。中国語の漢字一字分は平均して日本語の仮名

一・五字分にあたるという。そうだとすれば、漢字を十七字も使うと、情報量の点では俳句よりむしろ短歌に近いものになるのではないか。

以下「湾俳」の句例をいくつか示しておこう（『台湾俳句集（一）』）。個々の句の作者名は省略する。括弧内は私訳である）。これを見ると情報量においてほぼ俳句並みであり、第一句・第四句・第六句などは中国音で詠むとリズムの上でも日本語の五・七・五の感じに近くなるように思われる（括弧内は筆者による訳）。

中秋節 孤独老人難入眠

買冰棒 下課第一件

（名月やいねがたかりき老い独り）
（放課後は先づキャンデーを買ひにゆく）

愚人節情書到 半信又半疑

（四月馬鹿半信半疑のラブレター）

順風耳耳朶微動 春漸漸

（追い風の耳をくすぐる春隣）

神不在 森林中大騒動

(森中のごよめき騒ぐ神の留守)

回娘家 一句怨言未有身

(里帰りまだ子ができぬと怨み言)

これを現代中国の「漢俳」(漢字を五・七・五に並べた三行詩)と比較してみよう(今田述、二〇〇三)。

緑陰今雨来。 緑陰 今 雨来る。

山花枝接海花開、 山花の枝 海花に接して開き

和風起漢俳。 和風 漢俳を起す。

中国語では日本語の漢字の読みと異なり、「一漢字は必ず一音節」となるのは事実である。しかし日本語の場合と異なり、中国語の「一音節」には、閉音節や二重母音を含んでいる。右の一行目、緑(ǐ)・陰(yīn)・今(jīn)・雨(yǔ)・来(lái)は五音には違いないが、日本語の五音とはかなりリズム感が異なり、八音くらいに聞こえる(四声記号は省略)。日本人の感覚からいうと、これは俳句にヒントを得たにしても、やはり一種の「漢詩」だということになるのではないか。「漢俳」は伝統的な五言絶句と七言

絶句との合いの子のようなもので、行末が韻を踏んでいる(平仄)点でも漢詩の伝統をきちんと守っている(「湾俳」には押韻がない)。日本人が詠むのはかつての漢詩並みの教養が要るのではなからうか。

もつとも、日本語なら「雨来」(ame-kitaru)だけで五音となってしまうが、中国音で読めば「今雨来」でちょうど五音くらいに聞こえるだろう。ということは、「湾俳」は情報量だけでなく、リズム感の上でも、「平仄」にこだわらない点でも、「漢俳」を「和俳」に近づけたものと言えよう。「湾俳」が「和俳」といつも完全に一致するわけではないが、多くの場合俳句らしい訳をつけやすい。それに対して漢俳は、短歌ならまだしも、内容をかなり省略しないと、俳句に訳すことは困難だろう。

誤解のないようお断りするが、ここで問題にしたいのはそれぞれの「俳句」の相対的な特徴の比較であって、どちらが優れているかと言うことではない。ただ、当該言語で五・七・五の音節による三行詩を作ることが一般に国際俳句と呼ばれている現状からすれば、「湾俳」よりは「漢俳」のほうが一応グローバルな動向に近いように思われる。しかし「湾俳」は押韻がなく、長さやリズムや言葉のイメージ

ジなどの点で日本語の俳句（和俳）に近く、「漢俳」よりも日本人にも取り付きやすいのではないかと思われる。

二〇〇四年十一月正岡子規國際俳句賞受賞記念の講演會で、台北俳句會代表・黃靈芝は「どうですか、日本の俳人のみなさん。一度台灣語で俳句をお詠みになられては。割にやさしいですよ」と呼びかけていた。確かに台灣人が「和俳」を詠むのなら、日本人が「灣俳」を詠んでもおかしくないはずである。しかしかつて日本人は漢詩を詠み、さらに「和漢聯句」も詠んでいたが、現在は「灣俳」を詠むのでさえ容易ではないだろう。それよりも「和漢聯句」では、漢句は長句・短句を問わず五言に決まっていたようだが、これを若干手直しして、灣俳と和俳による國際聯句ができれば、日本人の参加もずっと容易になるかもしれない。その気になれば日本語の句と聯句を構成できるような特性を「灣俳」はすくなくも形の上で持っているのだから、その可能性を今後生かせないかと思うのである。

実はそれを先取りするようなことが日中間では連句の形ですでに行われているのである。「漢俳」は中国の詩の伝統を豊かにすることに成功したと言われるが、現在はさらに國際的な日中連句によってそれを発展させようとしている

るといふ。例えば次のようである（近藤正、二〇〇二年）。

- 一、風五月湖畔や日中連句會 中尾 青宵
- 二、紫小藤花井満園香 王 彦花
- 三、提琴を弾きつつ行けば道迷い 山本 晃子
- 四、曲尺知音終末來 王 榕
- 五、月光下欲購母親嘔心物 陳 秀英
- 六、想偷桶中兔存錢 李 成亮

（以下十四句まで漢句六句、和句二句。二〇〇一年五月三日）

ここでの漢句は「六十二字」という「灣俳」の形式に近いものになっている。しかもかつて日本で行われていた和漢連句においては、漢句は長句・短句の別なく、すべて五字からなっていたのに対し、ここでは長句・短句の別が立派に成立している。こうしたことが日本語との連句を成立させるために考案されたという点は極めて興味深い。

台灣の國語教育の創立者・伊沢修二は日本人が台灣語を学び、台灣人が日本語を学ぶ、「彼我相學」を唱えたが、結局日本統治期にそれは實現されなかった。どんな形であ

れ、日本人がかつての漢詩文のように「灣俳」を詠み始めたら、その時こそ日台相互対等の「彼我相學」が始めて本當の意味で實現することになるのではなからうか。しかしその点で台湾は中国に先を越されているのかもしれない。

参考文献：

- 今井祥子『「見聞記」台湾の日本語文藝の會』、東アジア文化史研究会『若鮎』第4号、二〇〇四年。
- 今井祥子『近代俳句史の周辺で——台湾と俳句』、『立教大学比較文明学会紀要：境界を越えて 比較文明学の現在』第5号、二〇〇五年。
- 今田述『《漢俳》を知っていますか』、『成城教育』第二二〇号、二〇〇三年。
- 大岡信『新折々のうた 1』一九九四年、岩波書店。
- 大岡信『新折々のうた 6』二〇〇一年、岩波書店。
- 岡崎郁子『黄靈芝物語——ある日文台湾作家の軌跡——』、研文出版、二〇〇四年。
- 尾形仿『蕪村自筆句張』一九七四年、筑摩書房。
- 尾形仿『蕪村の世界』一九九七年、岩波書店。
- 海後宗臣監修『日本教科書大系（近代編）』第4～9卷（國語1～6）、講談社、一九六四年。
- 黄英哲『台湾文化再構築 一九四五—一九四七の光と影』、創土社、一九九九年。
- 黄智慧『ポストコロニアル都市の非情——台湾の日本語文藝活動について』、橋爪伸也編『アジア都市文化學の可能性』、二〇〇三年。
- 皇民奉公会中央本部『新建設』（復刻版）、総和社、二〇〇五年。
- 黄葉『句集・遊苑』、南天書局、一九九九年。
- 黄靈芝『黄靈芝作品集・15』、私家版、二〇〇〇年。
- 黄靈芝『黄靈芝作品集・18』、私家版、二〇〇〇年。
- 黄靈芝『台湾俳句歳時記』、言叢社、二〇〇三年。
- 呉文星『日據時期台湾社會領導階層之研究』、正中書局、一九九二年。（中文）
- 孤蓬萬里編著『台湾萬葉集』、集英社、一九九四年。
- 孤蓬萬里編著『台湾萬葉集續篇』、集英社、一九九五年。
- 孤蓬萬里編著『孤蓬萬里 半世紀・台湾萬葉集補遺付』、集英社、一九九七年。
- 近藤正『日中連句研究…文体の探求』、『成蹊大学経済学部論集』第三三卷第一号、二〇〇二年。
- 蔡茂豊『台湾における日本語教育の史的探究』、東呉大學日本文化研究所、一九八九年。
- 佐藤和夫『海を越えた俳句』、丸善ライブラリー、一九九一年。
- 周婉窈『海行兮的年代——日本殖民統治末期台湾史論集——』、允晨叢刊、二〇〇三年。（中文）
- 『台北歌壇』（二〇〇三年一月に第一三七輯刊行、第一三八輯より『台湾歌壇』と改稱）

『台北俳句集』(二〇〇六年七月に「三十三」集刊行)。

台湾師範學校『台湾師範學校校友會誌』行啓記念号、大正二二年(一九二三年)六月

『台湾俳句集(一)』、台湾俳句編輯委員会、一九九八年。

池明觀『韓國文化史』、高麗書林、一九七九年。

陳秋蟾『ひとりごと』、台北歌壇叢書、一九七八年。

陳秋蟾『歌集・日草』、台北歌壇叢書、一九八三年。

陳秋蟾・陳昭仁『木屋』、私家版、一九八九年。

陳培豐『異心同體』の漢民族ナシヨナリズム』、『ことばと社會』、三元社、二〇〇一年a。

陳培豐『同化』の同床異夢——日本統治下台湾の國語教育史再考——』、三元社、二〇〇一年b。

陳培豐『日治時期的漢詩文、国民性與皇民文學——在流通與切断過程中走向純正帰——』、跨領域的台湾文學研究學術研討會、二〇〇五年。(中文)

天理台灣學會『二〇〇四年度研究大會發表要旨』。

『日治時期台灣公學校与國民學校國語讀本』全五期(復印)、南天書局、二〇〇三年(教科書は日文、解説の一部中文)。

藤井省三『台湾文學この百年』一九九八年、東方書店。

藤井省三・黄英哲・垂水千恵編『台湾の「大東亜戦争」——文學・メディア・文化——』、東京大學出版會、二〇〇二年。

『文苑(または「文藝」)、台湾教育會『台湾教育』(一九二二年)一九四三年)。

松永正義『台湾の文學活動』近代日本と植民地 7 文化の

中の植民地』、岩波書店、一九九三年。

本橋哲也『ポストコロニアリズム』二〇〇五年、岩波書店。

楊永彬『日本領台初期日官紳詩文唱和』、若林正文・吳密察

主編『台湾重層近代化論文集』、播種者文化、二〇〇〇年。

(中文)

若林正文『台湾の台湾語人・中國語人・日本語人 台湾人の夢

と現實』朝日新聞社、一九九七年。

Kleeman Faye Yuan (阮斐娜), *Colonial Nostalgia in Post-Colonial Taiwan. The 8th Conference of North American Taiwan Studies Association*, 2002

Peter Duus, *JHARD OR MCWORLD?: American Perspectives on the <Colonial Period> in Korea*,九州大學韓國研究中心『二〇〇四年一二月四日

あとがき: 本稿は日本台湾學會台北定例會(台湾師範學院、二〇〇五年三月一二日)における同じ題名の報告要旨に加筆したものである。自称「教育文化史」専攻の筆者としては越境もいところだが、「国際的・学際的に」研究を進めるとい同学会の趣旨に沿って報告したものである。参考文献目録を含めて不備な点も多いが、最近台湾俳句や台湾短歌が、日台の若手研究者間で研究課題になりつつある現状を鑑みて、若干の参考人・俳人の中には氏名の公表を希望しない人もいるので、その

場合には匿名とし、その人の句集や歌集などは文献目録からも除いてあることをお断りしておく。なお本文中では敬称をすべて省略した。最後に、『台湾師範学校校友会誌』（一九二三年）は、天理大学前田均助教授（当時）の好意により参照できたことに謝意を表したい。